

社
鳥

峰



4 月 号

第 5 卷 第 4 号

通 卷 第 35 号

目 次

巻頭の言葉

成仏に対する絶対的条件

自我偈講義へ久遠の本仏と人間釈尊▽第十四回

多宝如来の三つの誓願

三界ハ安キコトナシ

日高白象

春季恒例の福岡県街頭布教

松尾周輝

信仰体験談

人間礼拝と家庭の成仏

日高白象

信仰相談室

樂しい信仰

日高白象

33

29

26

15

6

4

開經偈講義案内
修行の完結
編集後記
37 35 28

北九州倍堂の建設
賛助会費志納者御芳名
36 36

表紙題字・身延山法主藤井日静猊下
表紙写真・インドへ渡つた身延山金銅の釈尊像

絶対的条件

「或る信仰座談会の席上、こんな質問がありました。

「仏教徒である以上、成仏を願わない者はありませんが、成仏に対する絶対的条件というものがあるのでしょうか。若し有るとするならば、それはどうものなのでしょう」

一瞬、満座の人々はシイーンと静まり返つてしましました。無理もありません、若し、そういう条件というものがあるならば、それになかなかつてはいるかどうかによつて、各人／＼の成仏、不成仏の如何が決つてしまふからです。この時、私は、

「成仏には、およそ四つの条件があります。まずその第一は、何といつても本仏釈尊に護念されるということです。少くとも自分の人生が、常に本仏護念の中にあるということを確信することです」と答えておきました。人々の顔にはホツとした安堵の色が漂つていました。思うに法華經第二十八章の普賢菩薩勸發品の中に、四法成就（または再現法華）といふことが説かれています。それは、(1)には諸仏に護念されることをえ、

(2)には正定聚に入り、

四には一切衆生を救うの心をおこす、
といふことですが、これはとりもなおさず成仏に対する絶対的条

成仏に対する

件とでも申されましよう。今この四つの条件を日蓮大聖人の立場で会通すれば、(一)は諸仏を統一する本仏釈尊に護念されることであり(二)はあらゆる功德の根源であり本仏釈尊の因行果徳の二法である南無妙法蓮華經のお題目を、身口意の三業に受持することであり、(三)はまさしく成仏すると定まつた衆(正定聚)即ち本仏釈尊の眷属である本化地涌の菩薩の一分となることであり、(四)は本仏釈尊の毎慈悲願を体して、すべての人々を差別することなく救うという大慈悲心を起し、今おかれている自分の立場において、分々に法華経信仰の尊さを一人でも多くの人々に、より深く伝えるということです。

これは大へん難かしいことのようですが、然し以上四つの条件は悉く本仏護念の一事の中に包括されており、本仏釈尊は人々の信・不信にかゝわらず無条件に昼夜の別なく常に平等の大慈悲を垂れておられるのですから、決して至難なことではなく、むしろ簡単なことゝ申されましよう。

若し本仏護念の中にあるならば本仏釈尊の血肉であるお題目を、おのずから自他ともに但信口唱され、地涌の菩薩の一分として成仏の道が定められるのです。然し、こうした簡単なことでありながら果して幾人の人々が本仏護念の中に生き、生かされている感謝の心をもつていいのでしようか。反省すべきことですね。

久遠の本仏と人間釈尊 ▲第十四回▽

多宝如來の三つの誓願

日 高 白 象



先月号は「仏舎利供養の贊否について」と題して、大乗仏教と小乗仏教の塔觀論争（本尊論争）を更に普遍してみたため、勢い見宝塔品を素材とする本筋から逸脱してしまった感がないではありませんでした。そ

と不審がられるお方もおられることゝ思います。

逃脱してしまつた感がないではありませんでした。そこで、もう一度、見宝塔品に立ち帰つて、その冒頭よりお話しを進めてみるとことにいたしましよう。然し、こう申し上げると読者の中では、「変ぢあないか。自我偈講義と題して、まず△久遠の本仏と人間釈尊△を論じているのに、見宝塔品を素材

にするのは方向違いちがないのか。方向違いの素材をまたはじめから使うなんて、少々見宝塔品にとらわれすぎているのではないか」

然し、決してそうではありません。何故ならば、法華經の肝心である靈山虛空会の儀相は、見宝塔品よりこと起つた釈迦・多宝の二仏並座を中心とするものであり、この儀相にもとづいて日蓮大聖人の大マンダラ図類があり、大マンダラにもとづいて日蓮門下すべて

の本尊勧請がなされているからです。

しかも、それにもかゝわらず今日の日蓮門下の中に
おいては、多宝如来に対しても二仏並座の意義に対し
ても、その解釈が曖昧模糊としており、このため、
「本門の教主釈尊そのものこそ、久遠の本仏の当体で
ある」

ということを、決定的なものとして論断することが
出来ず、

「能詮の釈尊の奥に、所詮の法身あり」

とか、

「二仏並座は能所不二を現わす」

等といつて、釈尊の奥に、或は二仏並座の奥に、そ

れをあらしめるところの久遠の本仏なるものを立てる
ことが一般となり、畢竟、法華經の本尊觀なるものが
真言の大日法身觀と類を同じくするような弊に墮して
いるからです。

そこで、二仏並座の儀相のこと起つた見宝塔品のは

じめにありかえつて、その真義をたずね、「釈尊と多
宝如來との關係」を多少なりとも究明してみたいと思
うのですが、もとより、これから述べようとするこ
とは、釈尊と多宝如來が、多宝塔の中で二仏並座の儀相
を整えたとはいえ、これによつて二仏は同格の仏陀で
あることを現わすものではなく、むしろ多宝如來は、
三世十方の諸仏を背景としながら、
「多宝塔の中に並座している本門の教主釈尊の当体こ
そ、久遠の本仏そのものである」

ということを実証するための、方便の化仏にすぎな
いものである、ということを論証しようとするにはか
なりません。

では、二仏並座を中心とする靈山虛空会の儀相、こ
れを図示された日蓮大聖人の大マンダラ、或はこれを
偶像化した寺院本堂の須弥坦上や、家庭の仏壇に安置
されている「三宝さま」を念頭にえがきながら、見宝
塔品の要所へを皆さまと一緒に考えてみましょ。

まず、この見宝塔品をひもといて氣付くことは、同頭の第一行より展開された「多宝塔の大地涌出」といふ、未曾有なる一大瑞相でありましょう。その意義については、既に正月号の本稿において、「多宝塔とは、大乘佛教と小乘佛教の塔觀論争を止揚開会するためのものであつた」

ということです。

ということを骨子として若干ふれておきましたのでこゝでは重説を避けたいと思います。次に氣付くことは、宝塔涌出の項についていた次の箇でありましょう。その時に宝塔の中より大音声を出して歎めてのたまわく、

「善哉！ 泥迦牟尼世尊、能く平等大慧・教菩薩法・仏所護念の妙法華經をもつて大衆のために説きたもう。かくの如し、かくの如し、泥迦牟尼世尊所説の如きは、皆これ眞実なり」

この経文は、古来「欲令衆」の一節として編纂され法華經を信行している人々には朝夕、方便、自我得と共に、特に親しまれている有名な經文であることは申すまでもないことです。そこで問題とされるのは、「何故、多宝塔の中より、このような大音声が発せられたのか。それは如何なる理由によるものであったのか」

経文を仏陀の尊い金言として信じて疑わず、頭から棒暗記して暗誦することも、決して無益なことではないでしようが、然し、こうした疑問を起して意義を明かにし、その上で読經を繰り返しつゝ、その内の仏意にふれるということこそ大切なことだと思います。

然し、このような疑問は、今はじめて起つたものではありません。既に泥尊の御在世當時、未曾有の多宝塔が大地より涌出し、この宝塔の中より扉を開したまゝ、かかる大音声が発せられた直後、会座の大衆が悉

くいだいていた疑問でもあつたのです。そのことを見る
宝塔品には次のように述べられています。

世尊、何の因縁をもつてか、この宝塔あつて、地

より涌出し、またその中より、この音声を発した
もう？

この時、大衆の中にいた大乗説（だいぎょうせつ）
菩薩という人が、大衆の心を代表して、その理由を釈
尊にたずねます。釈尊は次のように答えられています
「この宝塔の中には無量劫の昔、既に滅度した多宝如
来という仏陀がいる。この仏陀は、東方の無量千万億
阿僧祇という遠い彼方にある宝淨という仏国土の教主
であるが、曾つて菩薩道を行じていた時代に、次のよ
うな久遠の大誓願を起していた。即ち、

そこで今、私が、まさしく本門の法華經を開顯しよ
うとするに当つて、私の前で多宝如来が、みずから大
宝塔を涌出して大音声を放つたのも、実は菩薩時代よ
りの、この久遠の誓願にもとづいていたものであり、
これによつてます七宝の宝塔を涌出して所説の道場を
莊嚴し、ついで私が説くところの法華經を聴聞し、更
に未曾有なる法門の、その信じ難き眞実を証明するた
め、かかる未曾有なる一大瑞相をもつて讃歎しようと
するのである」

釈尊のこの説明によつて、大乗説菩薩をはじめ会座
の大衆は、未曾有なる瑞相の起り来つた因縁なるもの
を、はじめて納得し、大歡喜の心を起したというわけ
です。

そしてその説法をしたしく要聞し、更にその説法

が眞実であることを証明するために、虛空界にも
響き渡らんばかりの大音声をもつて、善哉善哉と
讃歎しよう……と。

たということや、多宝如来が大音声を放つたということに対する一往の説明とみなすことが出来たとしても、「では何故、多宝如来が、そのような誓願を起さねばならなかつたのか」

という疑問が起つた場合、これに対する解答にはなつていないので。

思うに、多宝如来の誓願は、「聞法」と「讃歎」と「証明」という三つの内容に分けることが出来、結じて「多宝如来の三つの誓願」と呼ぶことが出来ると思いますが、何故、多宝如来は、このような「三つの誓願」を、しかも菩薩時代から起していたのでしよう?

もとより多宝如来は、過去無量劫の者において、既に滅度していた仏陀なのですから、過去仏であることには相違はありませんが、如何に過去仏とはいっても、いやしくも宝塔の中で釈尊と二仏並座したほどの仏陀であり、四十余年未顯眞実という未曾有なる釈尊の法華經説法の、その真実なることを領識判断して、毫も

ためらうことなく、三千大千世界に向つて大音声に、その眞実を讚歎し證明することが出来たほどの仏陀であるのですから、今更、釈尊の説法を聴聞する必要はないはずです。然るに、何故に釈尊の説法を、わざわざ聴聞するという、初心者のような謹厳な態度をとらねばならない誓願をたてられて、いたのでしょうか?

また多宝如来が大音声を放つた理由を、説明された釈尊の言葉によれば、「十方世界の在々處々において法華經が説かれるならば、刹那に、その處に出現して聞法・讃歎・證明の誓願を果すためである」

と述べられていますが、何故に、法華經の説かれる在々處々において、そのたびごとに、この三つの使命を果すという、誓願をたてねばならなかつたのでしようか。

こゝに一つの警えを出してみましよう。或る國で、宗派仏教の盛んな地方があつたとします。然し、その地方には、いまだ曾つて一度も法華經が説かれたことがなければ、信せられたこともありませんでした。そこへ一人の旅人がやつて来て、一心に法華經を説法し始めたとします。もとより此の地方の人々の中で、誰一人として説法に耳をかたむけようとする者はいません。若し暫らくでも耳をかたむけた人がいたとしても、法華經を信ずるどころか、却つて法華經を誹謗し、これまで信じていた自分の宗旨に対しまず／＼執着を強くするばかりなのが通常です。

こうした場合、人々の信じている夫々の宗旨を排斥したり無視することなく、その悉くのものを開会統一するという立場で、すべての人々を一人も漏れなく、しかも一举に、法華經に帰一せしめる方法はないものでしようか。

若し、そういう方法があるとするならば、大衆が信

奉している夫々の宗旨の本尊である十方の諸仏が、悉くその場に出現して、諸仏みずから、その人の説く法華經を聴聞し、諸仏の説く法門よりも、遙かに勝れているという法華經の、その無上真実なることを心から讀歎し証明するにしくはありません。更に諸仏みずから、

「この人の説く法華經こそ真実であり、諸仏の法門はその方便である」

と述べ、

「法華經本門の教主釈尊こそ久遠の本仏であり、諸仏は悉くその分身にすぎない」

というように本末を明かにするならば、法華經を宣布する道は、より一層徹底されるであります。こうなれば本流と末流、幹と枝葉の關係が明かとなり、これまで諸仏に皈依していた人々が、理屈ぬきに法華經に皈一することは、火を見るより明かなことです。

この場合、無量無邊なる三世十方の諸仏が、一人一

人出現して、それぐるに聞法・讃歎・証明をなすよりも、若し諸仏を象徴し代表する仏陀がいるならば、その仏陀が出現して聞法・讃歎・証明の三事を果すことの方が、より簡明であり、より徹底することは申すまでもありません。

以上は、仮想の宗派仏教国における警えにすぎませんが、然し、実はこゝに多宝如來の出現と、多宝如來が「三つの誓願」を起さねばならなかつた根本的理由があるのです。

則ち、諸仏信仰にとらわれてゐる大衆をして、悉く法華經に坂一せしめるため、三世十方の諸仏が、みずから法華經を聞法・讃歎・証明するという「三つの誓願」が起され、その誓願が、十方の諸仏を総括的に代表し象徴する多宝如來の「三つの誓願」として代弁されているのです。

これまで屢々、多宝如來が十方の諸仏を総括的に代表し象徴する仏陀であることを述べて来ましたが、お

よそ仏身觀に法身・報身・應身の三身があり、應身は釈尊のことですか、三世十方の諸仏は法身仏と報身仏の二類に類別され、この二類を悉く總括總称するという意味から、多宝如來の仏名も、敢て「多くの宝」「多宝」といふ、こゝに多宝如來の靈格上、特に法身の性格を打ち出して、諸仏の中の一切の法身仏を總括し更に多宝如來の「三つの誓願」を、その菩薩時代から既に起していたとすることによつて、こゝに報身の性格を打ち出して、諸仏の中の一切の報身仏を總括し、両々相まつて多宝如來が、三世十方の諸仏を総括的に代表し象徴するものである、ということを意義すけているのです。

この意義すけは、後で述べられる見宝塔品の中、「宝塔開扉」の項において、多宝塔の扉を開くための絶対的条件として、三世十方の諸仏を一人も残さず、宝塔の前に来集せしめねばならない、ということによつて更に決定的な裏付けとされ、ついで十方の諸仏を

来集せしめる場所を造るため、「三麥土田」という未

曾有の大瑞相が展開されて来るのですが、蓋し多宝如

來の「三つの誓願」が、その菩薩時代において起され
ていたということは、多宝如来が諸仏を総括する上に
おいて、「多宝」という名称の上だけでは、法身の色
彩が濃いことをかえりみて、敢て報身仏の總括をも印
象するためのものであつたと申されましよう。

なお、ここで見落してならないことは、過去無量劫
の昔、既に滅度していたはずの多宝如来の、その菩薩
時代に起されていた「三つの誓願」が、未來の生きた
誓願として、現に果されているという事実です。

このことは、過去無量劫という無限大の時間を設定
し、これに比例して誓願の未來永遠性を打ち出してい
るのであります。それと同時に、多宝如来と二仏
並坐した釈尊が、法華經成立以前四・五百年の頃、既
に八十才で滅度されているにもかゝわらず、全く死滅
してしまつた單なる過去仏ではなく、未來永遠に不滅

の衆生済度をされている生きた仏である、ということ
を暗示しようとしているのです。

則ち、釈尊も多宝如来も、共に滅度した仏でありな
がら、釈尊の滅後四・五百年という年数と、多宝如來
の滅後無量劫という年数とを対比して、多宝如來の滅
後の年数が永ければ永いほど、

一これでも多宝如來の誓願は未來に生きている。況ん
や釈尊においては、なおさらのことである」
といふことを実感的に強調しているのです。

思うに、多宝如來が三世十方の諸仏を背景とし、諸
仏を総括象徴するものとして、みずから進んで「三つ
の誓願」を果すということ……そこには本仏としての
釈尊と、迹仏としての三世十方の諸仏との「一体不二」な
る、本迹不二なる関係も明かにされましようが、それ
と同時に、多宝如來に代弁せしめた諸仏の「三つの誓
願」にスポットを当てれば、諸仏のこの誓願こそ、迹
仏信仰に留まつてゐる大衆をして、悉く本仏信仰へ開

会統一しようとする、積極的な諸仏の意図を観取することが出来ましよう。

則ち、諸仏の「三つの誓願」の中の、その聞法とは述仏信仰に留まつてゐる大衆をして、いまだ聞いたこともない釈尊の法華経説法を聞法せしめる聞法であり、また法華経の真実に対する諸仏の讀教と証明は、述仏信仰の大衆が、その聞法によつて始めて法華経を信受し、不動の信仰を確立して、みずから欢喜讀教すると共に、いまだ法華経を信仰していない人々に対しても法華経の無上真実なることを讀教証明して入信をすゝめるという、大衆の積極的な信仰実践を示唆しているものといえるのです。

以上これを要するに、多宝如来の「三つの誓願」は実は、そのまま三世十方の諸仏の「三つの誓願」を代表するものであり、同時に一切大衆をして悉く、大衆なりの立場における「三つの誓願」を実践せしめることが要請するものであつたのです。即ち、これと言ひ

かえるならば、三世十方の諸仏の誓願より発する音声と、大衆の誓願より発する音声とが多宝如来の大音声となつて放たれたというわけです。

さて、このよう考へて来れば、朝夕の勸説の折、読みならわされていた「欲令衆」の中の、「その時に宝塔の中より大音声を出して數めてのたまわく、善哉く……皆これ真実なり」というこの一節の経文の中に、三千大千世界の虚空に溢れるばかりの三世十方の諸仏並にその眷属、そしてこれに従う無量無邊なる一切大衆をも包括した宇宙的な規模と、万教開会統一の思想、更には大衆の積極的信仰実践が包含されているものとして再認識されるのみならず、今後これを誦詠する上において、今までにない新たなる感動と、そして大いなる氣宇・使命感が呼び起されることでしょう次号は、この「三つの誓願」に関連して、諸仏の「三つの放棄」ということについて述べみたい、と思います。

三界ハ安キコト無シ

分銅志靜



もみにもんだ小学校の統合問題

が一段落してから、私達は議員の研修旅行に出ることになつた。二泊三日という枠があるので、あまり遠くへは行けなかつた。

私達文教委員のコースは、東京

私は、
△今度こそメシャ教の美術館が見
られる△

と、たのしみにしていた。

ところが、出来てきた交通公社の周遊券をみると、意外なことに私達の泊りは箱根ではなく、全く

伊豆の中ほどまではいるので、富士五湖めぐりは箱根よりはるかに不便な筈である。おそらく交通公社では、その方面の旅館と特別のつながりがあつて、一方的にそんなスケジュールを組んだにちがいない。

私は内心不愉快でならなかつた。修善寺なら三島でのりかえ、根の泊りは強羅になつていたので

しかも修善寺は、伊豆でも一番密

教のつよいところで、役ノ行者や弘法大師とつながりがあり、温泉も弘法が開いたという伝説がある

それで私は、これまで修善寺には立ち寄らないようにしていた。しかし研修旅行ともなれば、わがまばかりも言つておれなかつた。

一行は八人であつた。東京で陳情を終え、新幹線で熱海についたのが三時、それから普通列車にのり、三島で私鉄にのりかえ、終点の修善寺へついたのは、五時すぎ

で、陽がだいぶん西にかたむいていた。すぐ駅前からバスにのり、十分足らずで温泉街の停留所に到着された。近くの案内所で指定のホテルをきくと、ここから歩いて

十五分はかかるという。ホテルに連絡すると、まもなく一台の車が迎えに来た。

車は旅館のたてこんだ中心街を通り抜け、橋を越え、しばらく川淵にそつて、山手の方にのぼり、急に田舎や農家の見える山あいに出た。みんな呆つ気にとられていううちに、車は坂の上の和風の玄関の前についた。

宿泊料も高く、名前もホテルになつてるので、さぞかし立派なもの修善寺へついたところ

なつてるので、さぞかし立派な高級旅館と思いこんでいたところ

木造建ての、なんの奇もない平凡な旅館であつた。しかも通された田舎が迫つている。これには一同

うんざりした。わざわざ修善寺まで田舎の視察にでも来たようなものである。

とにかく一風呂浴びようということで、一同気をとりなおし、浴衣に着がえをはじめた。しかしこのまゝ風呂にはいり、一杯やつたんでは、修善寺へ来た意義がないので、私だけは洋服のまま、こつそり旅館を出た。せめて修善寺の夜叉王の面だけでも見ておこう、と思った。

さつき車の中で、修善寺の三門を見て通つたので、だいたいの道順の見当がついた。石ころ道を歩いて行くと、まもなく鋪装の道に出た。この道を行けば、中心街に

出そうである。道に迷うほどの大きな温泉街でもなかつた。谷川をはさんで两岸に、温泉街がまたがつてゐるようである。

私は車で通つた木橋をわたらずに、鋪装の道をまっすぐにすんだ。やがて旅館や待合のような門構えの家がつづき、三味線をもつて連れ立つていく芸者の姿も見える。どこからともなく三味線の音も聞えてくる。

山あいの空は、まだ明るかつたが、温線街の狭い通りには、もう夜の燈がともりはじめていた。そのなんでもない夕べの光が、ここのコ屋や遊戯場などもあるが、し

つとりとした通りの情緒にとけこんでいる。店舗の造作なども安っぽくない。やはり千年有余の伝統が、どこかに息づいてゐるのである。

白亜のホテルが、そば立つあたりに来て、道は左に折れる。すぐ向うに朱塗りの立派な橋が見える。その折れまがるところで、ふと私の眼にとまるものがあつた。「源頼家の墓」とかいだ赤い矢印がついている。その目立たない小さな標示板は、旅館の横腹のひさしの下にさがつていた。私は思わずそこに釘づけになつた。

源頼家といえば、頼朝の嫡男に生まれ、二代将軍の栄職につきながら、母親の政子に憎まれ、わずか二十三才で、この修善寺で殺された薄幸の將軍である。しかしその死は意外であつた。私は躊躇せずに、矢印のしめす狭い露路へはいつた。

人間に生れて、自分の親に殺されるほど哀れなことはあるまい。

その非業の最後を思うと、八百年をすぎた今も、頼家の怨霊は、うかばれないような気がしてならない。せめて御題自の一篇でもと思い、私は足もとの暗くなつた露路を抜け、裏山の小径をのぼつた。

石段をのぼると目の前にひさしの

かたむいた荒れ放題のお堂がある格子から中をのぞいたが、まづくらで何も見えない。堂の西隅に二王尊らしいものがまつられてあるが、それもさだかでない。

頼家の墓は、そのお堂のうしろの一段高いところにあり、石の柵をめぐらして、中にはいれないようになつてゐる。苔むした墓碑には、頼家の名前や戒名らしいものが彫りつけてある。征夷大將軍の文字も見える。柵の前に燃えさしの線香がちらばつていた。私はそれを拾いあつめて、火をともした。あたりをつつんだ木立ちにはもう夕闇がただよいはじめていた私は念珠をつまぐり、声高らかに

法華經を読經し、さらに長い時間御題目を唱えた。そして回向文に附して、法華經醫論品の「今此三界」の要文をくりかえし唱えた。それは唱えるというよりも、唱えさせられているようであつた。

今此ノ三界ハ

皆コレ我ガ有ナリ

其ノ中ノ衆生ハ

悉クコレ吾ガ子ナリ

而モ今、此ノ処ハ

モロモロノ患難多シ

唯我レ一人ノミ
能ク教護ヲナス

兄と弟との間には、つねに笑い声が絶えない。しかし、一度その平和がくつがえると、親が親であることを忘れ、子が子であることを忘れる。なかには、みずから災害の中に飛び入つて、子に抱きする母親もいる。しかし則天皇后や北条政子のように、政権の亡者となつて、わが子を我欲の犠牲にするものもある。

政子は鎌倉幕府の実権をにぎろうとして、父親の北条時政と組んで、源氏の正嫡である頼家を殺しぁつて殺した。実朝は自分に危害の及ぶことを知つて、熊野へ逃がれようとしている矢先、北条にけ

私は経文を唱えながら、心のふるえるような深い悲しみにとざされた。人生平和な時には、親と子

しかけられた頬家の子公曉に殺されたのである。三界は經文のことく火宅であり、業火は熾然として止むことがない。

經文の「我れ」とは釈尊のことである。たとえいかなる患難、業火の中にあつても、我れこそは、一切衆生の救いの主であり、また我れ一人だけが、衆生のまことの師であり、たよりである。

私はこの釈尊の大慈の呼びかけが、天の甘露のように頬家の亡魂の上にそぞろことを祈つた。読經を終えて、石段をおりるとつきあたりに、みやげものの業焼の窯場があつて、あかくと火が

はいつている。窓の前に、この町内のの人らしい四・五人が立話をしていた。彼等は、さいせんから私の讀經の声を聞いて、何者かと関心をよせていたにちがいない。一齊に顔をふりむけて、好奇の視線をそいだ。讀經する旅人があらずしかつたにちがいない。

二十坪ばかりの狭い館の中には私は急いでそこから修善寺へ向つた。朱塗りの橋を越えると、まもなく修善寺の三門の前に出た。弘法大師が開いた寺だというが、今

の觀世音寺の大黒天によく似ている。椅像であるが、様式が筑紫の觀世音寺の大黒天によく似ている。そうとうの年数を経ているらしく、神韻がただよつていて、神韻がただよつていて、

私の目的は「修善寺物語」をかいた野村胡堂が、それをみて夜叉王の着想をつかんだという能面である。それは、いくつかの面に交

私は早速事務所へ行つて、宝物

の拝観を願い出た。坊さんが出て来て、もう宝物館を閉める時間なので、いそいで見て欲しいと言つて、向いの宝物館に案内してくれた。

つて、左の陳列台の上にあつた。

それを見て、私は戸惑つた。青年頬家の顔をうつしたという面は舞楽面のように大きく、しかも歎きをむき出したドクロのような恐怖の面である。その上、全体がくちばしでて、ぼろぼろになつてゐる。思わず寒気のたつような不気味さである。

説明書をみると、頬家が入浴して

いる時に、政子のまわし者が、湯に塗（うるし）をながし込んだため、頬家は身体を顔も焼けただれて、二目とみられない恐しい顔となつた。頬家は政子の仕打ちをうらみ、かわりはてた自分の顔を政子にみせつけるために、わざと

能面づくりに顔をうつさせたといふ。これはその時の面だ、ということがかかれてある。

その真偽のほどはわからないが、権力の鬼となつた政子は、頬家を修善寺へ幽閉しても、まだ安心が

出来ず、弟の義時に命じて修善寺に不意討ちをかけ、頬家を殺してしまつた。

一説によると、その時も頬家は

風呂にはいつていた。裸のまま桶などを行つけて手向かつたが、まもなく首に桶をまかれ、しめ殺されたという。

ところが、皮肉なことに、その同じ宝物館の中に、頬家の菩提を弔うために、政子が納めたという

宋版の法華經八巻があつた。自分で殺しておきながら、後から菩提を弔うということもおかしな話だが、とにかく宋版の法華經とはどんなものかと、つみかさねられた經本をのぞいてみた。

八巻を四巻づつんで、上の一本だけが開かれてある。みると、それは法華經第三の譬諭品で、しかも、

「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子……」

の經文である。私はどきつとするような衝動にゆすぶられた。さつき頬家の墓の前でいくども繰りかえした經文が、六万九千三百八十文字の法華經のうち、ただその

一ヶ所だけが開かれていたのである。

人は偶然というかも知れない。

しかし私は、そうは思われない。私が町はずれで、車で通つた木橋をわたつたら、おそらく私は、頼家の墓へは行かなかつたであろう。あれやこれや思いあわせると私は頼家の墓をたずね、この経文を唱えるために、めぐりめぐつてこの修善寺へやつて來たような気がしてならないのである。

母に憎まれ、母に殺された子はいつたい誰れにすがればよいのだろうか。それは唯我一人の法華經の教主釈尊以外にない。それよりほかに、頼家の成仏の道もありえ

ないのではないか……。

私は、そんな思いにとりつかれながら、すでに夕闇に沈んだ人気どられた温泉街の、ざわめきの中に下りていつた。

翌日、私達は朝早く修善寺を発ち、沼津九時三〇分発の富士五湖めぐりの観光バスにのり、快晴の富士を一周した。

私は本栖湖畔で一行と別れ、そこから乗合バスにのりかえ、標高五・六百米の険な山道を越え、甲斐の国にはいり、身延山に夕方についた。翌日、宿坊で日高師と逢い、半日を歎談し、帰路、

北山本門寺へ参詣、さらに東京で

二泊して、一行より三日ばかりおくれて帰郷した。

それから一週間もたたぬ頃、私は必要あつて、秋燈下に日蓮聖人遺文全集をよみふけつていた。さわやかな初秋の夜で、書物に映える燈の光も、心なしか明るかつた時を忘れ、頁をめくるうちに、善無畏鈔という真蹟現存の御遺文に至り、私は豁然たるものを感じた。一字一字が金色の光をはなつて、私の眼に焼きついた。

これまでいくどとなく、この御遺文に眼を通しながら、私はこの文意を汲みとることが出来なかつた。私の眼は、いたずらに活字の

上を往来していたにすぎない。今機縁いたつて、はじめて一大事因縁を得ることが出来た。

善無畏とは真言宗八祖の一人、中印度の烏ダ国(アーダ)の国王であつたが、位を兄にゆずり、マカダ国(マーカダ)のナーランダ寺の達磨彌多の弟子となり、三密の諸印契をことごとく受け、その後、師とともに支那にいたり、大日經等を翻訳し、唐の玄宗皇帝から日月のよううにうやまわれたといふ。その善無畏が、ある時、頓死した。

大聖人は善無畏鉢に、次のようにしてゐる。

かくのごとくいみじき人なれども、一時に頓死ありき、よ

みがえりていわく、我れ死につる時、獄卒來たり、鐵の杖を以て散々にさいなみエンマ宮に至りぬ。八方聖教一字一句もおぼえず、ただ法華經の題目ばかり忘れざりき。題目を思いしに鐵の繩すこしくゆりぬ。息ついて高声にとなえていわく

『今此ノ三界ハ皆是我ガ有ナリ、其ノ中ノ衆生ハ悉ク是吾ガ子ナリ、而モ今此ノ処ハ諸ノ患難多シ、唯我レ一人ノミ能ク救護ヲナス』等云々、七つの鉄の網切れくだけ十方

にも、善無畏三藏鉢(文永七年)をあらわし、善無畏の頓死とその蘇生についてくわしくしるされてゐる。その中に善無畏ほどの高僧が、何故に地獄におちたかという疑問をかまえ、それは真言の大日經等を第一とし、法華經を第二にくだし、また大日如来を本尊とあがめ、釈尊をなげすてた誘法(正法をあしさまにののしつた)の罪によるものと断をくだし、地獄にあつては、真言のいかなる秘法も印契も説なく、ただ釈尊の金言法華經の功力による以外に、成仏得脱の道がないと説かれてゐる。

今此三界皆是我有……の三十二文字に、いかなる力が秘められて

いるか、私は知らない。それは凡智の及ぶところではない。しかし

この三十二文字には、衆生を吾が子として、その救済を誓われる釈尊の大慈悲心がこめられている。その釈尊の限りない愛の祈りが、微塵数の仏の光明となつて、われわれを地獄の責苦の中から救うのであるうか。

ゆくらなくも修善寺へ訪れ、この法華経の活文字にふれて以来、私ははじめて三伝国来の法華経の経力の偉大さを、身をもつて知るところが出来た。なんの意味もないと思われた修善寺行も、今、静かにふりかえつてみれば、私にとつては生涯の、大きなみちびきの旅

であった。

最近、私はとりつかれたように大小の釈尊伝によみふけつている

この晩年の衝撃は、人間釈尊について、ほとんど耐えがたいものではなかつたろうか。

なかば伝説化された釈尊のご生涯の中には、人間の偉大な魂のふるさとを感じさせる数々のメルヒンがある。それをよんでいると、現世の一切の苦惱がやわらいでいくしかしその中に、ただ一つの悲痛な物語がある。

それは釈尊の最晩年に、突如としておそつた釈迦族滅亡の悲劇である。釈尊も人間として、そのいたましい嵐の中に立たなければならなかつた。

この起りは、コーサラ国のプラセーナジト王が釈尊を崇拜するあまり、釈尊の一族と血縁となることを願い、敢えて小国の釈迦族から、自分の妃を求めたのであるしかし、ほこり高い釈迦族は、他種族との混血をきらい、わざと奴隸の娘ウアーサバーを、王のもとに送つた。その娘と王との間に生れたのが悪名高い毘瑠璃王（ヴィルーダカ王）である。

彼は幼少の頃、母の國へ遊学しそこで自分を奴隸の子とあざける

祝迦族の言葉を耳にして、生涯消すことの出来ない屈辱感を心に刻んだ。

そして成人すると、彼は武力で父王のプラセージトを追放し、みずから王となり、祝迦族殲滅の計画を実行に移したのである。

祝迦族は農耕を主体とした小国で、武力ではコーサラ国の敵ではなかつた。ヴィルーダカ王は大軍を率いて一挙に祝迦族をもみつぶそうとした。

その時、御年八十才になんなんとする老祝尊は、ただひとり、国境の枯木の下に坐つて、ヴィルーダカの通りかかるのを待ち受けていた。王は、その祝尊の姿におど

ろき、馬から下りて声をかけた。

「どうして枯木の下におられるのか、繁った木もありますのに」

「王よ、一族は樹木の枝葉のようなものである。枝葉がほころびようとしている時に、そのかけにはやどれない」

祝尊は、枯木の姿とならなければならぬ悲痛な心情をうつたえた。その枯木は、キリストの十字架にもひとしい。さすがのヴィルーダカも軍をすすめることができず、そこから軍を引きかえした。

しかし積年の怨みは、ついに癒えることがなく、ヴィルーダカはその後まもなく大軍を起し、カピラ城をおそい、文字通り祝尊族を

殲滅した。

祝尊の不殺戒を信奉する祝迦族のほとんどのが、無抵抗のうちに殺された。ただ五百人の美女だけが捕虜としてコーサラ国に引かれた。

しかし彼女達は王をみると、口を開いてののしつた。激怒した王は、女達を一ヶ所にあつめ、手足をばらくにして殺すことを命じた。

裸にされた女達が、刑場にさだめられた広場に引きずえられ、つぎくに手足をもぎ切られた。女達は地獄の断末魔の中から、祝迦族の聖者祝迦牟尼仏の御名を呼んで救い求めた。

釈尊は急を聞いて、その場にかけつけたが、世俗の王の権力の前には、手の下しようもなつた。釈尊はその血の池の中に立つて、涙ながらに叫んだ。それは釈尊の生涯になかつた説法である。

女達は、その釈尊のみ声に心もやわらぎ、合掌のまゝ屠殺されていつた。

それを目撃する釈尊のご心境はどうなものであつたあろう。

殺されたいく女達は、みんな釈尊の血につながるものである。身がわりが出来るならば、釈尊はそこに御身を投げ出したにちがいない。しかし世法は、それすらも許さない。

釈尊の偉大な力をもつてしても

常ニ生老病死ノ憂患アリ

世法と仏法は、つなぎとめることが出来なかつたのである。そこに

是ノ如キラノ火
燄然トシテ息マズ

は人間の底知れない罪業の淵がよこたわつている。

如来ハ己ニ
三界ノ火宅ヲ離レテ

釈尊が、その広場でいかなる説

寂然トシテ閑居シ

法を行つたかは、今につたえられていらない。私のよんだかぎりの伝

林野ニ安処セリ

伝には、何ものつてない。

その怖畏慟哭の声は、やがて衆

しかし今、心静かに法華経の譬

のである。

喻品をよむ時、私はその経文のか

今此ノ三界ハ
皆是我ガ有ナリ

げに、釈尊の慟哭の声を聞くよう

其ノ中ノ衆生ハ
悉ク吾ガ子ナリ

な思いがしてならない。

而も今、此ノ處ハ

三界ハ安キコト無シ

諸ノ患難多シ

猶ホ火宅ノ如シ

衆苦充满シテ

甚ダ怖畏スベシ

△終△

春季恒例

第四回 福岡県街頭布教

松尾周輝



東筑地区——街頭獅子吼する
藤山布教師会長

福岡県において宗務所主催の街

頭布教が起つたのは昭和三十九年

の正月、冬休みを返上した身延山
学生布教別動隊一行二十余名が、
日高白象師引率のもと大挙西下し
たのを契機とするものでした。

爾来、福岡県では新春を迎える

ごとに、宗務所長木島智境師を陣

頭とし、立正青年会が実動の中核

となり、全寺院、檀信徒を打てつ
一丸とした街頭布教が、恒例の年
中行事として展開され、年々素晴らしい布教成果を盛り上げながら、
回を重ねること今年で四回目を数
えるに至っています。

蓋し、宗務所を主催として毎年

全県下に街頭布教を展開するとい

うことは、全国でも稀有な仏事で

○二月十三日 西筑地区

甘木市の妙照寺を会場として立

正平和祈願と講演会。動員二百名

○二月十九日 豊前地区

田川市の丸山公園より後藤寺商店街と香春町を擊鼓行進。貸切バ



△豊前地区
香春蓮華寺本堂前▽

ス七台、動員五百名。午後より香

展開。

○二月二十五日 筑後地区

春の蓮華寺において立正平和祈願と講演会。この講演には特に身延山より日高白象師が出講。夜は座談会。

○二月二十一日 博多地区

東公園の日蓮聖人大銅像前より博多市街を擊鼓、蓮池の妙典寺にて立正平和祈願と講演会。動員二百名。

○二月二十四日 東筑地区

折尾警察署前にて立正平和の幟幕を張りめぐらした寺院白家用車十台が集合。これより若松、戸畠八幡、直方、宮田、飯塚、大隈、天道の市街をパレード。走破百四十きロ。要所にて街頭説法を

「私は旧制中学校時代、柔道の稽古を通して先輩の日高師から、日蓮大聖人の法華經信仰の息吹きを

くことでしようが、今度の布教に参加した香春蓮華寺の檀徒である地元高等学校の西村教頭は、次のように所感を述べていました。

今後とも福岡県下街頭布教は毎年展開され、年々盛大になつて行くことでしょうが、今度の布教に

大川市の常清寺における講演会を皮切りに大川、柳川、瀬高の市街を擊鼓行進。瀬高の本長寺にて

受けました。今日、高校の教

と感じたことでしょう。

師として青少年の教育に当る時、

ギスくした世の中の人々が、

痛切に必要を感じるのは、日蓮大

セめて「心に光りを……」もつこ

聖人の立正安國、知法思國の祈り

とが出来たら幸いであると思いま

です。この祈りが、今や日本国の大

す。

全体に失われようとしています。

私たちも、もつと大音声に

このたび私も街頭行進に参加さ

お題目を唱え、深き祈りをこめて

せて頂きましたが、天にも轟くお題目、天鼓の響き、それを耳にし

て行かねばならない、と思うばかりです

そして行進する私たちの姿を目の前にした沿道の人々は、これを何



筑後地区——
瀬高の河橋を渡る
街頭布教隊

第七回法華経講義の集い

開經偈の講義御案内

法華経を信仰する人々は誰でも声をそろえて「無上甚深微妙の法は……」と開經偈を誦詠していますが、その意味を知っている人は殆どおりません。

そこで第七回目の講義の集いでは特にお願ひして鷺峰主幹の日高白象先生に「開經偈の講義」をして頂くことになりました。奮つて御参加下さい。

日時 五月六日（第一土曜）

午後六時半より九時半
まで

会場 横浜大乗物産KK二階

京浜急行「井士ヶ谷」

駅横

人間禮拝と家庭の成仏へその一

日 高 白 象



我が郷土の街頭布教

昭和四十年度は小倉

昭和四十一年度は行橋

というように毎年、重点的に街

去る二月十九日、福岡県豊前地
区の街頭布教が、田川市と香春町

において展開されました。

これまで豊前地区では管内二十
数ヶ寺の寺院住職、教会主管者そ

してその檀信徒が結束し、

昭和三十九年度は門司

立正大学に学ぶまでは、田川の小

学校、中学校に通つていたもので

した。

そして昭和十八年の暮、学徒と

して太平洋戦争に出陣し、昭和二

十一年復員してより昭和二十七年

東京開教をめだして九州の地を離

れるまで数ヶ年の間、単身、北九

州一円を撃鼓行脚し、特に郷里の

田川市郡においては、歩かない道といふ道はないほど擊鼓して廻り香春の蓮華寺、金田の常立寺、大法山の天慎寺等々には、幾晩も幾晩も泊めてもらつたものでした。

その後、東京開教の途中、三十一年の暮、身延山布教部へ入り、「みのぶ教報」の編集を担当する宗門未曾有の身延山街頭布教を起し、三十九年の正月、身延の学生布教別動隊をつれて再び九州の土を踏んだのは、去る昭和二十七年九州をたつてより十三年ぶりのことでした。

曾つて東京開教をめざし、法鼓

一本を友として渡つた関門海峡を

十三年ぶりに渡る今は、二十有余名の学生僧と共に、門司駅頭に降り立てば、曾つて単身擊鼓行乞の布教に明け暮れていた郷土には、街頭布教に身を固めた数百の寺院・檀信徒が、熱氣あふるゝばかりに待機していました。

その時の感動は、生涯どうして忘れることが出来ましよう。それは生れてよりこのかた世話になりぱなしであつた郷土の恩に、この布教を通して十三年ぶりに始めて報ゆることが出来るという感動でした。

爾来、福岡県においては年々全県下に亘つて街頭布教が展開され、豊前地区においても重点布教の成

果が積みあげられて、いよいよ今年は、我が先祖のねむれる田川地区において未曾有の街頭布教が、爆発的に決行されるに至つたのです。

二月十九日午前九時、集合地点である田川市丸山公園内の孝性寺境内には、遠く門司・小倉・行橋権田方面よりも貸切バスをつらねた檀信徒が、寺院単位に統々とつめかけました。その教およそ五百

その中には、曾つて十数年前、行乞布教に明け暮れていた時代、一夜の宿を与えてくれた人々や、ほころびた衣を縫つてくれたり、ニギリメシを供養してくれた老婆の姿も見うけられました。

定刻九時三十分、藤山伝道隊長

の指揮棒一閃、堂々の行進が起りました。それは新興宗教立正交正会の御会式万灯行列を遙かに凌ぐものであり、擊ちならず五百の法鼓は一糸乱れず、文字通り市街をゆすぶり、市民の耳目、心胆を奪うばかりでした。

いや、そればかりではあります。私たちの頭上には「諸天擊天

鼓」という経文の通り、あたかも仏祖三宝・諸天善神が、みずから天鼓を擊ち、お題目を唱え、私たちと行動を共にされているかのようでした。

私個人としても行進コースは、曾つて一人で擊鼓した懐しい道であり、現前の行進が威風堂々して

いればいるほど、往時を偲び瞼のうるむ思いも屡々でした。

正午、予定通り香春の蓮華寺に到着し、午後一時より新装なつた鉄筋の本堂において、蓮華寺住職松代円心老僧が導師となつて立正平和祈願が行われましたが、本堂の中は立錐の余地もなく、檀信徒は堂外にまでもひしめいていました。

香春蓮華寺参道を登る
豊前地区街頭布教隊の
長蛇の列



つづいて木島宗務所長の挨拶があつた後、私が講壇に立つたのですが、この時、錚々たる寺院布教家の面々を前にして、心中忸怩たるものがありました。それよりも生れ故郷の由緒ある寺院において、始めて講演させて頂く光榮を心から感謝すると共に、

今は亡き我が祖母、我が母が、

生きて此の会堂で、講演する私の妻をみ、私の話しを聞いてくれたならば……

「という思いを禁ずることは出来ませんでした。それだけに眼前の

聴衆が、祖母や母に代つて聞いてくれているようにも思え、思わず講演に熱が入り、檀信徒も体を乗り出しだ聞き入つてゐるようでした。

その日の一切の布教予定が、盛

大裡に終了したのは午後四時近くでした。そのあと布教の興奮いまださめやらぬ中、蓮華寺婦人会の方から次のように申し入れられました。

「私たちは台所の仕事に追われて

いたので、講演を聞くことが出来なかつた。どうか夜分にでも、私たちのために、もう一度、別の話してもよいから、して欲しい」ということであつたのです。

そこで夕食後、本堂で車座になり、「信仰と生活」と題して、うちとけた話しをしたのですが、よほど身につまされるを感じたのでしよう、靈談会に入つた時、一人の老婆が、豊前独特の川筋弁

いうのではなく、浄土真宗の家庭にありながら、家族や親戚のあらゆる罵詈・打擣をも堪え忍び、人間礼拝の一一行に徹し切つて、遂に一家をあげて日蓮宗に改宗せしめたという、現代宗門人の範ともすべき尊い物語であつたのです。

思えば、この物語は、このたびの福岡県下街頭布教中にめぐりあうことの出来た思わざる宝でもあります。

りました。

さて、いよいよこれから本「わたしの一生の一大事も聞いちおくれ」と身を乗り出して来ました。

仰体験談は次号のお楽しみに……。

それは親子三代に亘る素晴らしい

樂しい信仰

解説 日高白象

おたずね

信仰をするということは確かに
よいこと、思います。そして法華
經を信仰することは、あらゆる信
仰の中でも最も勝れたものとも思
っています。

然し、御宝前に正座して合掌し
お經やお題目を唱えるということ
は、実際に自分でやるとなれば、
正直なところ億劫でありもあり、
また苦痛でもあります。

△これちあ、いけない△

△これちあ、いけない△
と思つて努力すればするほど、
ますく苦痛になつて來るのが現
実です。

△朝夕のお勤めも欠さずしなけれ
ばならない△

と思つてはいても、思いばかり
がドス黒い穢のようにならぬばか
りで、御宝前に坐ることの稀な
が日常となつてしまつています。

こうした心境から脱け出るには
一体どうすればよいのでしよう。
おこたえ

△いずれの仕事にしても勉強にし
ても、嫌々するようでは決して能
率のあがるものではありません。

△仕事や勉強に能率をあげている
人は、必ず仕事そのもの勉強その
ものに楽しみというものをもつて
います。いわゆる自受法楽しながら
仕事をし勉強もして、よりよき

能率をあげているのです。

そこには、仕事そのもの勉強そのものに対する愛情というものが、あるはずです。

原稿を書くということ、原稿用紙の枠目を一つ～文字で埋めて行くという作業、それは精神的にも肉体的にも重労働ではあります

が、その原稿が活字となつて読者に読まれるということを執筆の時点に持ち込んで、読者と共に語るという気持をもつならば、執筆もまた楽しいはずのものなのです。

世界的有名な芸術家にしても、その作品を仕上げるには、常に

す。身も心も削りとられるようなデツサン、然し本人そのものは仕事を打ち込んだ楽しみというものもついているのです。

それは自分の行為に対する愛情というほかはありません。その愛情が深ければ深いほど、偉大な仕事を仕上げて行くのです。

或る有名な彫刻家が次のように語つていました。

「一心に彫刻していた時、フト氣付いたことは、自分が彫刻しているのではなく、ノミが彫刻していた」ということだつた」

佛教では通常、こうした人の心境を「無心」という一言で片付けて、デツサンをくりかえしていくま

ているようですが、無の根底には深い愛情の蓄積をみのがしてはならないと思います。おそらくその彫刻家は、一本のノミでさえも、血の通う自分の腕のように愛していただことでしょう。

また「無心」という譬えに、「鞍上人なく、鞍下に馬なし」

と人馬一体の境地が引用されていますが、然し、人が馬を我が子のように愛し、馬もまた人を親のように慕うという、互いの愛情の交流なくして、どうして、このようないきがひとりでに走つていた、と

さて、

「御宝前に坐るのが儀劫である」「朝夕のお勤めは苦痛である」

ということですが、それは貴方

ばかりではなく、大半の人々が、
そうであろうと思います。

然し、そう言われる貴方の心を
掘りさげてみれば、神仏の靈的實
在を信ずるとか、神仏の限りなき
愛を信ずる、という心が稀薄であ
つたり、欠如しているのではない
でしようか。

このため読經・唱題というもの
が、神仏との「愛の交流」となる
ことが出来ず、却つて感情も伴わ
ない義務づけられたノルマとして
自分の心に飛ね返り、そこに「信
仰はよいことではあるが、どう
も億劫だ、苦痛だ」ということに
なつて來るのでしよう。

神仏は娑婆に即する靈界に嚴然
として実在しています。そして久
遠の昔から昼夜の別なく、私たち

はもとよりすべての人々を、一刻
も早く救済しようとして、大慈大
悲の御手を垂れたもうおられる
のです。信仰とは、身分自身の上
に垂れられている神仏の大慈悲を
確信することから始まるのです。

お經やお題目は、神仏が私たち
に呼びかけておられる「愛の声」
であり、そのお經やお題目を唱え
奉る当所に、既に「愛の交流」が
現成し、仏子不二、凡仏一如の境
が開かれているのです。神仏の限
とは本来楽しいものなのです。

修行の完結

「修行は何時完結するのか」と人々が論じあつていました。大抵の人は「仏陀となつた時」と主張しました。その中で「唱題の当所に既に完結されている」という者がいました。皆が反駁しました。

「それざあ、もう修行する必要はないぢやないか」その人はカラカラと笑いながら答えました。

「何時かはという修行は、何時になつても完結しないし、また、もうしないでいい」というような修行は実は完結されたものではない。眞実の修行は、その当所すでに完結しており、完結されたまゝ仏陀となつた後でも、時々愈々に相続されるものなのだ

北九州僧堂の建設

昭和四十二年度

福岡県の福智山国定公園の中心部に当る豊前上野峠に「誓願の滝、行学道場」を建設する運びとなつて来たことは既報の通りですが、これは身延山を本とする全国僧堂建設の第一陣として意義あるものです。

このたび立正と身延の両大学を卒業した鷲峰会青年僧が、来る六月一日より一百日の間、こゝに参籠し苛烈な修行に入ると共に、夏期休暇中の一般青少年の練成にも当ることとなりました。

このことは地元町役場や観光協会が全面的に道場建設に協賛し、必要な土地は全山どこでも提供すると申出ていること、あわせて、本化僧堂建設に一層の拍車をかけるものであります。読者皆様の御支援をお願いすると共に、夏期青少年練成に参加希望者あるを待つものです。

鷲峰賛助会費志納者御芳名

鷲峰賛助会員とは本誌の発行、人材養成、布教活動という鷲峰青年運動に対して、精神的経済的両面より参加して、毎年三千円を志納される方です。鷲峰会の維持発展のため、賛助会員の貢献するところ誠に甚大なるものがあります。こゝに本年度の志納者御芳名をかゝげ感謝の意を表します。

東京都	中田 穆彦	和歌山市	土橋 通宏
横浜市	野崎 康充	富士宮市	清 周代
尼崎市	田中 資郎	久留米市	井上 イツノ
名古屋市	吉田 邦昭	柳川市	宮崎 隆道
	鈴木 鉴一	熊本市	小寺 崇元

以上敬称略、順序不同

前承四月十日現在



編集後記

鷲峰四月号

昭和四十二年

第五卷 第三十四号

定価五十円 送料二十五円
昭和四十二年四月五日 印刷
昭和四十二年四月十日 発行

編集兼発行人

山梨県身延町波木井三区醒悟堂本妙庵

日高白象

印刷 山梨県身延町梅平

藤田印刷所

山梨県身延町波木井三区四二二五

鷲峰会

電話(身延山)四五九番

振替(甲府)二〇九三番

誌代	半年分	四五〇円	(送料共)
贊助会費	一年分	九〇〇円	(送料共)
	一年分	三〇〇〇円	(分納可)

*四月八日は釈尊降誕会、四月二十八日は、日蓮大聖人の立教開宗会、この間三七、二十一日、春の風に吹かれながら修行するのもまた一興★本妙庵にいた仲若と浅見君が立正大学へ進学していくたゞ後に残る学生は渡辺君たゞ一人。送別の折、二人が「本妙庵生活のあとを顧りみて」座談会を開いた。その記事は頁数の都合、連載の最終回目に来ていた。転論聖王と本門の戒壇の原稿と共に次号廻しになつた★四月九日東京より行脚して来た七人の俊ならざる青年たちが、本妙庵に落ちついた。暫らく静かであつた本妙庵も、またにぎやかになるだろう★東京身延間の行脚紀行も次号へ載せたいと思うし、横浜の「法華経講義の集い」の折、講義された立正大学教授執事海秀先生の、念佛、禪、真言そして創価学会やキリスト教の本尊觀と対比した「日蓮聖人の本尊觀」の原稿も紹介したいが、それにして早く三種郵便の認可がとれて、頁数を増やしたいものである。